

## 夕刊文化

シネマ  
万華鏡

身の危険が迫った時、耳が不自由な人はいかにしてそれを察知するのか。津波警報も「逃げろ!」という叫び声も聞きとれない人々はどうすればいいのか。2011年3月に起きた東日本大震災の際、難聴者の身上に起きた危機を通して、災害と聴覚障害者を描いたドキュメンタリーである。

冒頭シーンは象徴的だ。震災直後の被災地で聴覚障害者にカメラを向けていた撮影隊は避難するが、その際監督は津波警報のサイレンが聞きとれない。今村彩子監督自身が難聴者であり、まさに震災に直面した聴覚者協会会長の小泉さん。

## きこえなかったあの日



東京・新宿のケイズシネマで公開中

## 難聴者と震災 10年の記録

障害者の危機を経験する。そんな今村監督が避難所で、強い余震に襲われた撮影隊は避難するが、その際監督は津波警報のサイレンが聞きとれない。今村彩子監督自身が難聴者であり、まさに震災に直面した聴覚者協会会長の小泉さん。小泉さんの紹介で知り合った

加藤さん……。

生活を送る難聴者に手話を使いながら話を聞く。買いたい物に震災に遭い、近所の人の車で津波を逃れた信子さん夫婦。宮城県聴覚障害者協会会長の小泉さん。小

泉さんの紹介で知り合った

加藤さん……。

それぞれは生活環境も性情も異なる。例えば一人暮らしの加藤さんは、もう学校で口話の推奨のため手話が禁じられ、読み書きが難しく独特の手話を使ってい

るが、その物おじしない性格から、避難生活でも散歩を欠かさず、集会所で誰にでも明るく接する彼の姿を見ると心が和む。

映画は、東日本大震災直後から年月を追って、加藤さんをはじめ知り合った人たちを中心に展開するが、後半は、16年の熊本地震やその2年後の西日本豪雨の被災地、そして現在のコロナ禍にある聴覚障害者の姿をどうしていく。

熊本地震では難聴者への救援センターが設けられ、西日本豪雨では難聴者のボランティア活動が描かれるが、東日本大震災後に鳥取県から始まった手話言語条例の広がりなど10年の変化を巧みに追っている。

今村監督は自身の危機感から人々にカメラを向けて長期取材することで説得力ある世界に仕上げている。

1時間56分。★★★

(映画評論家 村山 匡一郎)